

ICT を活用した教育体制構築に関する実証事業 報告書

1. 学校名	
ハノイ日本人学校	
2. テーマ	
非常時においても、ICT 機器を効果的に活用できる環境の整備とセキュリティーの強化	
3. 取組の概要	
(※報告書の内容を要約し、200～400 字程度で記載してください。)	
<p>本校では、ICT 環境を整えるという目標を達成するために、①環境整備、②ICT 機器活用、③セキュリティーの強化の3本柱で実証事業に取り組んだ。①に関しては、ハード面で Apple社の製品を主とし、ソフト面では、年度の前半は school Takt と Zoom の併用、後半は G-suite for Education を軸とした。それぞれの良さがあり、一概にどれが優れているとは言えないが、児童生徒や教員にとって、前半のソフトの活用経験が後半の実践に生きた。②に関しては iPad と Apple TV の連携が、児童生徒および教員にとって、教材提示や発表・表現活動をスムーズにした。また、G-suite の活用により、非常時のオンライン授業の提供がスムーズになった。③に関しては、セーフティーマニュアルや諸規約の作成を行った。通常の授業の中で ICT 機器を活用することが、非常時のオンライン授業の実践に直接つながることが本実証事業を通して分かった。児童生徒および教員のインタビューからは、重要な課題や視点が見え、ICT 活用・改善の方向を示唆するものであった。</p>	
4. 取組の背景・目的	
(※非常時でも途切れない「学びの保障」の在り方と関連づけて記述してください。)	
<p>取組の背景</p> <p>本校は、2020 年のコロナ禍におけるベトナム国の強力な感染症対策により、児童生徒が登校することができない非常事態を経験した。ベトナム国は過去の SARS 時の対応の失敗を教訓としており、今後 COVID-19 等が発生した場合も、政府は国内に徹底した対応を求めることが考えられる。そのため、児童生徒の学びの継続には、オンライン授業の導入が喫緊の課題となっている。</p> <p>オンライン授業の導入に向けては、課題が山積している。</p> <ul style="list-style-type: none"> (1)安定したインターネット環境の整備 (2)ハード面およびソフト面の整備と充実 (3)セキュリティーおよび、情報モラル教育の徹底 (4)システム維持に係る費用 (5)教員および児童生徒の ICT 活用スキルの向上 (6)非常時における学びの継続の具体 	
<p>取組の目的</p> <p>本取組では、以上の課題の中から主に (1) (2) (5) (6) を重点として学校全体でチームをつくり取り組むこととした。ICT 機器は日々進化し、我々教員の知識やスキルが追いついていない現状がある。本事業は実証事業である。個々の教員が上記の課題を意識しながら、授業の中で ICT 活用を実直に進めることが、非常時にオンライン授業を行い児童生徒の学びを保障することにつながる。また、本校での経験を、他校と共有することや、次の赴任校で各教員が自信をもって身に付いたスキルを活用することも重要である。何より、本取組により、児童生徒の学びに向かう力が高まることを最上位の目的として ICT の活用を進めていくことが肝要である。本校の児童生徒がタブレットを自分の手足のように活用し、それぞれの学びを深めたり、自分の発表したいことをプレゼンテーションソフトを活用してまとめ、Apple TV に映し出しながら自信をもって意見を発信する姿は、Society5.0 社会を生きていく日本人の近未来の姿を映し出しているようである。</p>	
5. 取組の実施日程	
日程	取組内容
2020 年	
4月	AppleTV(25台) TVモニター(25台) Google Classroom 導入
5月	ネットワーク環境の整備 オンライン授業開始(school Takt と Zoom による双方向授業)～9月1日まで School Takt 導入(11月のGoogle Classroom正式運用まではこちらが主)

9月	協力校決定通知書受領 校内での実証方法(案)および校内体制の確立
10月	G-suite の正式導入を保護者に通知 J A Lによるオンライン講座(中学部 3 年生対象)
11月	ICT 研修会実施(KDDI様 EDL様によるオンライン講習会) Google Classroom のアカウントを全児童生徒に配布 正式運用開始 2020 年4~6月のオンライン授業に関するアンケート(教員・児童生徒)実施と分析 中学部 1人1台の iPad 活用スタート(授業等での ICT・Google Classroomの活用)
12月	小学校高学年 1人1台 iPad 活用スタート オンライン授業に関する聞き取り調査(児童生徒・教員) 上記調査の分析(質的)
2021年 1月	中3帰国生徒等を対象にしたオンライン授業再開 ICT 活用に関するアンケートの実施 本取組に対する評価 国立高等専門学校によるオンライン授業(中学部1・2年生対象) 本校の ICT 活用に関する校内規定等の策定 実証事業報告書(成果物)の作成
2月	コロナ市中感染発生により、市内教育機関休校措置 オンライン授業へ移行 ICT を活用した教育体制構築に関する実証事業 報告書の作成と提出 ※なお、ICT 教育アドバイザーの河内様には、水曜日の12:30(ベトナム時間)にオンラインミーティングで助言をいただいた。(月2回程度) ※在ハノイJICA専門家にセキュリティーに関する助言や情報をいただいた。

6. 具体的な取組内容 (※詳細に記載し、付属資料があれば添付してください。)

① ICT 環境整備

本事業において、整備したものと主な費用(数字は概算)は以下の通りである(表1)。

表1「主な事業費の内訳」

物品名・サービス名	単価(円)	個数	費用(円)
Zoom 使用料(11ヶ月) 導入費用込み	15,500	20	310,000
school Takt 使用料 (中学部のみ)	3,300	85	280,500
Apple TV(全教室分)	20,000	25	500,000
TV モニター	68,000	25	1,700,000
iPad(追加購入分)			別会計から
Sim	5,400	24	129,000
モバイルルーター			別会計から
インターネット使用料			別会計から
Google Suite ドメイン	25,000	1	25,000
Google トレーニング (現地スタッフ管理者向け)	100,000	1	100,000
Google 教員向け研修会80分 (日本からのオンライン)			

今回の環境整備にあたっては、コロナ禍という背景による「必要性」の高まりが最も大きかった。ベトナム国は令和2年2月から休校措置が開始され、それは令和2年度になっても続き、通常の学校生活が行える見通しが立たなかった。3月末に文部科学省からの派遣教員の3分の1が帰国し、入れ替わりに赴任するはずの12名の派遣教員は、文部科学省の指示により国内待機となった。このことから、オンライン授業を実施し、児童生徒の学びを保障することが急務となった。ハノイ日本人学校では、以前からICTの導入を少しずつ進めており、中学部では school Takt を使った課題の配布は行われていた。

2000年4月当初は、ベトナム国内において3人以上が集まることが禁止され、公共交通網も利用できなくなっていた。

5月になり、段階的に児童生徒の登校が始まり、様々なオンライン授業がスタートした。児童生徒は学校あるいは自宅でオンライン授業を受けていた。日本で待機している派遣教師によるオンライン授業も開始され、Zoomを用いた授業を提供した。

ハード面で Apple 社の製品を採用したのは、いくつかの理由がある。ハード面の整備については、本校に所属する文部科学省派遣教員が中心になって実施した。以下にその理由を示す(表2)。

表2 Apple 社の製品を採用した理由

- ベトナムにおいて、Apple 製品の入手が他社に比べて比較的容易であること。
- 児童生徒が使うタブレットとして、iPad の使いやすいこと。
- アプリ等のセキュリティーの高さ。
- OS の切り替え等によるコスト面の優位性。
- ベトナムにおいて、修理等が可能であること (サプライヤーがある)。

② コロナ禍のオンライン授業の実践の記録(非常時の学びの保障に向けて)

本校では、2020年4月より、オンライン授業を実施した。このときに私たち教員は、多くのつまづきと発見を得ることができた。この知見を蓄積し、次の非常時に備えることは重要である。

(ア) 教員に対する実践の聞き取りの実施

オンライン授業を実施した教員を意図的に選出し、聞き取りアンケートを実施した。意図的とは、生徒のアンケートから授業が「わかりやすい」と評価された教員や、技能教科を担当した教員、その他様々な工夫をした教員を指す。聞き取りは、3名程度の集団で、当時の状況を話してもらう方法で、20~30分程度の時間で実施した。そのデータから見えてきたポイントや課題を一度整理し、各教員が再度テーマごとにまとめた(表3)。

表3 各教員がまとめたテーマ(15の事例)

- | | | |
|---|------------------|-------|
| 1 | 分かりやすい授業を行うための工夫 | (4事例) |
| 2 | 双方向の授業を目指すための工夫 | (5事例) |
| 3 | 学力保障を行うための工夫 | (4事例) |
| 4 | 未解決事例 | (2事例) |

双方向の授業を円滑に進めるために、意思表示をするカードを作成した事例や、学力保障の観点からホームページで毎日の学習内容のまとめを掲載する事例は、これからオンライン授業に取り組む学校の参考になると考える。

また、体育科や音楽科の授業においては、授業実施者だからこそその気づきや課題があった。これを未解決事例としてまとめた。

(イ)児童に対する聞き取り調査の実施

オンライン授業を受けた児童生徒に、感じたことや、工夫したことを聞きとって分析をした。児童生徒については、担任から「意欲的にオンライン授業に参加していた児童生徒」あるいは、「オンライン授業中も学力を維持あるいは向上させた児童生徒」を抽出した。この抽出のねらいは公衆衛生分野で用いられる「ポジティブデビアンズアプローチ」に基づいている。同じ環境下にある児童生徒の中で、良い成果を上げた人物に焦点を当て、その理由をさぐるという考え方である。グループ分けは以下の通りである。

第1グループ 小学3年生3名

第2グループ 小学5年生3名(1名は一時帰国しており、日本から授業に参加)

第3グループ 中学校3年生3名

本聞き取り調査から、オンライン授業における課題や、児童生徒の側で行われていた工夫や環境の違いが見えてきた。それらを11の項目にまとめた(表4)。

表4 オンライン授業に積極的であった生徒の特徴(参考)

- (1) 自分が活動する場面がほしい。あるいは、自分の考えを表現したい。
(活動とは・・・質問や発表、作業、問題を解く、対話する等)
 - (2) iPadを手元に置きたい。授業時にコメントしたり、調べたりしたい。
 - (3) クイズ形式やゲーム形式のような楽しみがある授業を受けたい。
 - (4) ICT機器を場面によって使い分けていた。または、2台以上を同時併用していた。
 - (5) 授業以外の時間を活用しようとした。
 - (6) 教師の指示がなくとも、効率の良い授業の受け方や記録の仕方を見つけ出していた。
 - (7) ベトナムの事情もあるが、iPadを普段から使用している。
 - (8) 自分の家が安心できる。
 - (9) 快適な環境にカスタマイズしている。
 - (10) 家庭の生活に学校生活が適切なバランスで乗り入れている。
(家族の協力が背景にあることが考えられる)
 - (11) 学校の授業の内容は普段から理解しており、必要に応じて学習の自己調整ができる。
- ※ベトナムの事情・・・Apple製品の入手が容易であること。サプライヤーが多いこと。

(ウ)ICT 機器の活用(非常時の学びの保障に向けて)

本実証事業の中核をなす取組となる。ICT機器を用いた様々な工夫のある授業実践を積み重ね、新たな非常時において、児童生徒の学びを保障することを目的とする。ICT機器の整備が、当初の計画より遅れてしまい、中学部と小学部高学年を中心とした取組報告となるが、低学年や中学年においても、iPadの導入を順次進めていく予定である。

本校で取り組んだ事例のうち6事例は以下の通りである(表5)。各事例の詳細については成果物を参照とする。

表5 本校で実践したICT活用事例

- 事例1 「iPadを活用した動きの客観化とふりかえりカード」
- 事例2 「Google Classroomで冬休みの思い出を共有しよう」
- 事例3 「共同編集を活用したグループ活動」
- 事例4 「Google Classroomを活用した授業の振り返り」
- 事例5 「アクティブラーニングを非常時の学びの継続につなげる試み」
- 事例6 「通常授業とオンライン授業のハイブリット型の授業づくり」

どの事例も、ICT機器やG-suiteの機能を生かしたものである。事例5や6については、普段の授業の構成を工夫し、非常時にオンライン授業にシームレスに移行すること意識したものとなっている。

児童生徒および教員を対象にした聞き取り調査からは、ICT 機器の活用に対する期待や、非常時のオンライン授業移行への準備ができていることが読み取れる（図1・図2）。

図1 Google Classroom と Meet でオンライン授業ができるか（児童生徒）

オンライン授業になったとき、Google ClassroomとGoogle Meet（またはZoom）を利用すれば、自宅でもある程度の授業を受けることができる。

49件の回答

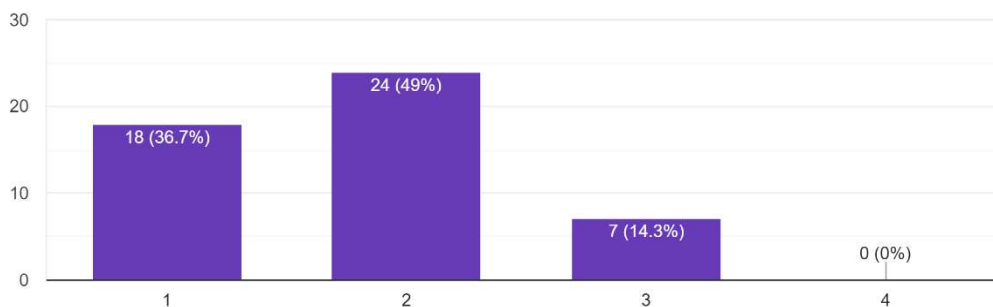
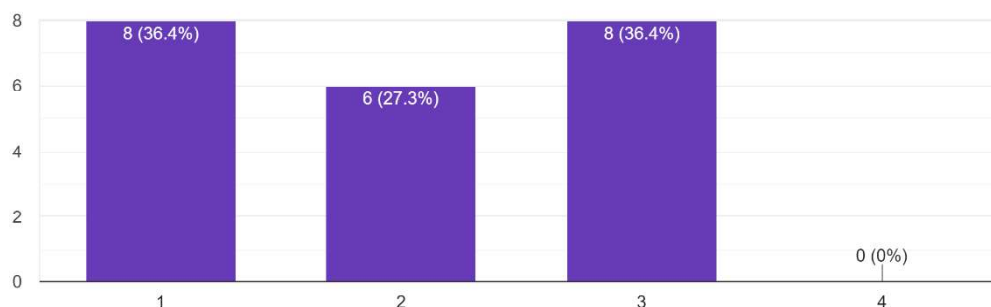


図2 Google Classroom と Meet でオンライン授業ができるか（教員）

オンライン授業になったとき、Google Classroomを活用して授業を展開することができますか。

22件の回答



聞き取り調査の結果からは、児童生徒よりも、教員の方が不安を抱えている様子がみられる。教員のスキル向上を図り、不安なく授業を行える環境作りを進めていかなければならない。

オンラインの特性を生かした取組として、遠隔にいる専門家によるオンライン授業や講習がある。本校では JAL 様や国立富山高専様の協力をいただき、中学生を対象とした授業を実施した。生徒からの高い評価を受けた取組の一つとなった。

③ セキュリティー・情報モラル教育等の充実

児童生徒、あるいは教員が安心してインターネットやメール、G-suite for Education を活用するためには、セキュリティーの充実が重要である。そのためには、校内規定の見直しや、非常時のマニュアルの作成、有識者による講習受講等が必要になる。

今回の実証事業期間中には、G-suite for Education の利用規約とセーフティーマニュアルの作成と、活用のための講習会受講を実施した。

(ア)G-suite for Education の利用規約と、セーフティーマニュアルの作成

保護者に G-suite for Education の利用規約を配布し、利用上の注意点 (ID の管理等) について周知した。また, JICA ベトナム事務所のサイバーセキュリティ専門家の助言をいただきながら, セーフティーマニュアルを作成した。マニュアルには読みやすさ, 保管の簡便さを考慮し, 重要な確認事項のみ厳選するなどして, A4 版の両面印刷となるように工夫した。

(イ)G-suite for Education の基本的な操作等について専門家から講習を受ける

図3 講習を受ける様子

教員の ICT 活用スキルの向上は, セキュリティーの向上に直結する。実際の活用方法や, セキュリティー上の疑問を解決することを目的とし, 専門家によるオンライン講習会を実施した (図3)。教員 2 名を生徒役として, 実際に授業を行うスタイルで講習を受講したため, 即実践に生かせる内容であった。



7. 取組の成果

(※どのような課題をどのように解決したかや、生徒・児童への効果等について詳細に記載し、成果物があれば添付してください。また成果がどのような観点で他の学校の参考になるかも記載してください。)

成果1 ICT の導入によって、「非常時の学びの保障」という目標に近づけたか

生徒への聞き取り調査の分析結果から見えてきたことがいくつかある。小3, 小5, 中3のいずれの集団からも, Zoom オンライン授業に対して肯定的な意見が見られたことである。その中で最も顕著なキーワードは「安心」であった。彼らは, 自宅に勉強しやすいスペースを作り, ほぼストレスを感じることなく学習できていた。また, オンライン授業の画面を写メで撮ったり, 授業そのものを録画記録して, 後で見直すなど, より学びやすいように学びの形をカスタマイズしていた。端末を2台接続し, 1台は画像を見るために, もう1台は音声を聞いたり, 発言をするために用いていた。

自分の意思を画面の向こうにいる先生に伝える工夫を自発的にしていた児童がいた。折り紙を使って, 色と文字でアピールした。

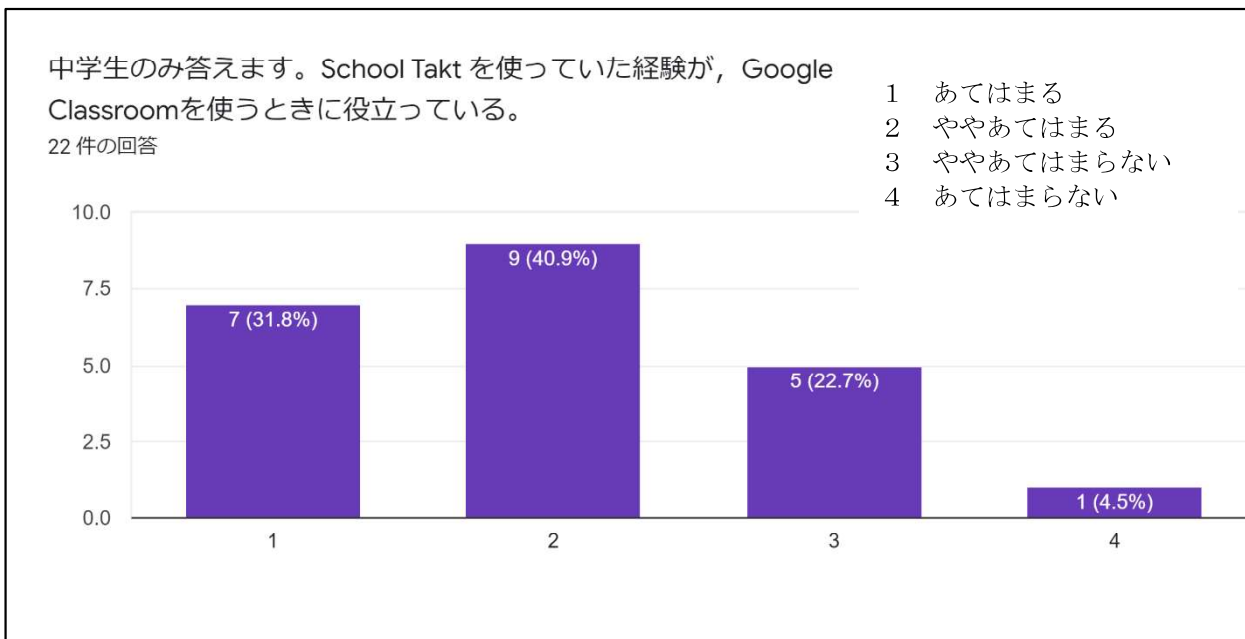
実技の授業は, 児童生徒にとっても苦労が多かった。しかし, 彼らの頭の中には, 授業から6か月たった聞き取り調査でも, 当時の工夫に満ちた授業の記憶が焼き付いていた。まだまだ工夫すべき点はある。全てをオンライン授業で行うのは難しいことは児童生徒も分かっている。しかし, 私たち教員が, 児童生徒の学びを保障するために知恵を絞る, 次の非常時に備えなければならない。

オンライン授業実施時の各教師の工夫について, 各教師への聞き取り調査から見えてきたことがある。それは, 教師の思いから自発的に生まれた血のにじむような創意工夫であった。誰もが課題としてあげたのが「児童生徒の学びの見とりが難しい」「生徒に発言させるのが難しい」といったものである。

実際に生徒の声として「発言をしにくかった」というものが散見された。一方で, iPad を使用すると発表がしやすい。あるいは, 学びやすくなったという声が聞かれた。パワーポイントで自分の考えをスライドに作り替えて, アニメーションをつけて発表する姿は, これからの学びの在り方を私たちに見せてくれているようであった。これからは, ICT を活用した「発信力」「プレゼンテーション力」が求められ, ICT は児童生徒の表現の可能性を広げてくれる。

school Takt には, オンラインで課題を提出したり, 提出された課題を採点して, 生徒にフィードバックする機能がある。コスト面で G-suite を次年度以降利用することになったが, コロナ禍の初期に school Takt と Zoom の利用で学びを継続できたこと, そして, その土台があったからこそ Google Classroom に短時間で順応できた (図4)。

図4 school Takt 活用の経験が Google Classroom に役立っているか



1 1月から実施された G-suite for Education を用いた ICT 活用の取組では、ICT 活用の可能性や、通常時と非常時のシームレスな接続を試みた授業実践が行われた。図5は、普段から実施している iPad を使った学習が、オンライン授業に切り替わったときに生かせると考えているかを聞いたアンケート結果である。

図5 iPad を用いた学習が、オンライン授業に生かせるか(児童生徒)

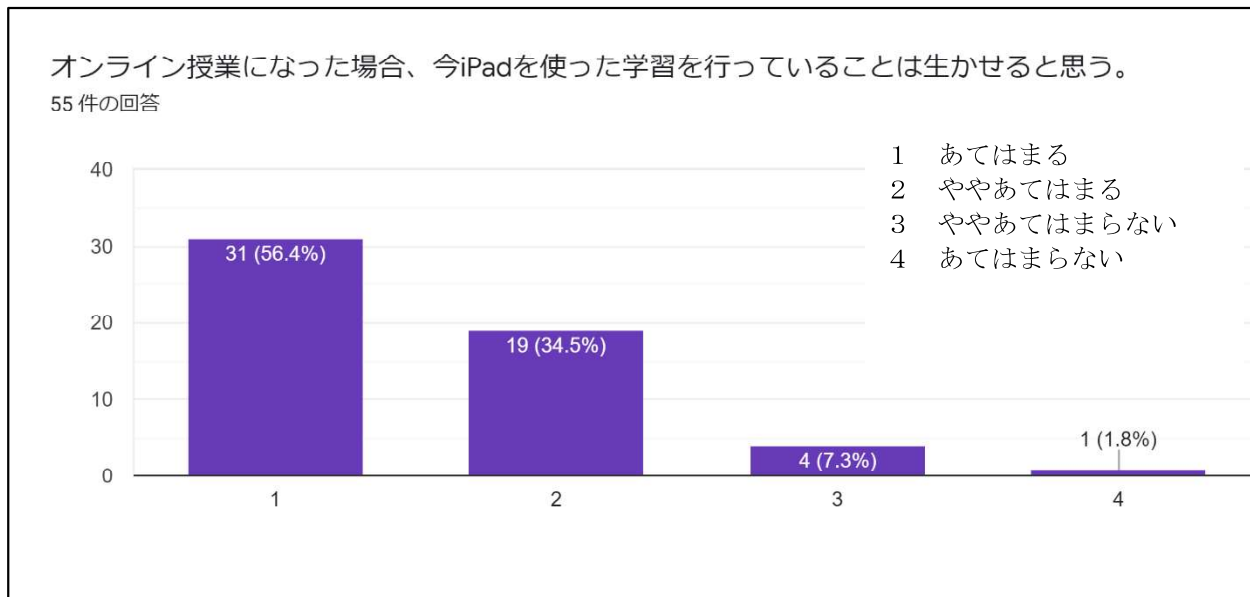


図2で示したが、教師の中には、まだ非常時のオンライン授業を Google Classroom で行うことに対して不安を感じている層がある。様々なアプリケーションがあるが、どれも完全に私たちの行いたいことを実現してくれるものではない。また、使用方法を複雑に感じる教員がいることも事実である。学校の ICT 担当者が、校内の組織と連携しながら、全体の ICT 活用スキルを高めていくことが大切である。

「非常時における児童生徒の学びの保障」という目標については、主観的な評価となるが本校としては、本事業の支援を受けて大きく前進できたといえる。その原動力になったのは、児童生徒の ICT 機器への順応力と、各教師の課題意識と工夫の積み重ねであるといえよう。

成果2 これからオンライン授業を進めていく学校へ

本校のオンライン授業経験者が実際に行った授業の記録から見てくることがある。

一つは授業の双方向性に関する課題である。活用の事例2-1「リアクションカードを作ろう」は、児童生徒の意思（わかった・わからない）や解答をスムーズに行うためにどうしようか悩んだ末に生まれたアイデアである。これは、現在各学校で推進されている「特別の教科 道徳」における、児童生徒の気持ちを見取る工夫（心情円など）と共通する部分がある。教師の工夫で、双方向性の授業を作り出すことができることを示す好事例である。

英語科では Zoom の「ブレイクアウトルーム」を活用して、生徒同士でグループワークを行わせている。これは、生徒対生徒の双方向性を実現することができ、学習に対する不安の解消に役立ったと生徒が感じている。

また、特殊な事例ではあるが、生徒は登校しており、教師が自宅等の遠隔から授業をするケースにおいては、教室に授業の支援者をおくことで、生徒の学習状況を把握し、適切な支援ができた。また、有識者や専門家のオンライン授業は生徒にとって大変有意義なものとなった。

二つ目に、技能教科の実施についての課題がある。音楽科の授業者からは、実践した当人でなければ分からない問題点が挙げられている。「音質やテンポの問題」は大きな課題である。リコーダーの音の一部を拾わないというケースや、合唱のテンポが合わないという問題は、実証事業の期間内に解決することができなかった。一方で、鑑賞教材は工夫次第で実施できた。インターネット上には有益な動画がたくさん存在することが分かり、それらを適切に活用することが鍵となる。

小学校の運動遊びについては、取り組める内容と、難しいものがはっきり分かる。鉄棒や水泳、跳び箱等はオンラインで実施するのは厳しい。体力づくりの活動やダンス等の表現活動、サッカーボールのリフティングなどは様々な工夫により楽しい授業作りができる。

最後に、セキュリティ面の課題である。本取組では、教師のためのセーフティマニュアルの作成と、オンライン講習会を実施した。しかし、これらは最低限の内容である。個人情報適切に保護するために必要なことや、安全・安心なオンライン授業を実施するための留意点は現在も増えている。約束事を徹底すること、デバイスのアップデートやウイルス対策を確実にすること、トラブル発生時の対応を整理すること、そして児童生徒の情報モラル教育を見直すことが急務である。

児童生徒からの聞き取り調査から見てきた結果は 11 項目にまとめた（表 4）。

この 11 項目は、5 月～9 月に、様々な環境でオンライン授業を受けた児童生徒から「積極的に取り組んだ」人物を抽出して、質問した結果から浮かび上がったものである。サンプル数が少ないのであくまでも参考としての扱いである。しかし、得られた項目はこれからオンライン授業を推し進めていく学校にとっては何らかの示唆を与えてくれるのではないだろうか。

成果3 ICT を活用した授業作り実証から

本事業により、普通教室に Apple TV を導入し、教師からの教材提示や、生徒のタブレットからのミラーリングによる発表が瞬時に行えるようになった（図 6）。



図6 ミラーリング機能を使用

児童生徒は iPad でプレゼンテーション資料を作成し、それを Apple TV に写し出し、プレゼンテーションを行い、うまく発表できた充実感を味わっている（図7）。

図7 iPad を活用すると発表がしやすいか(児童生徒)

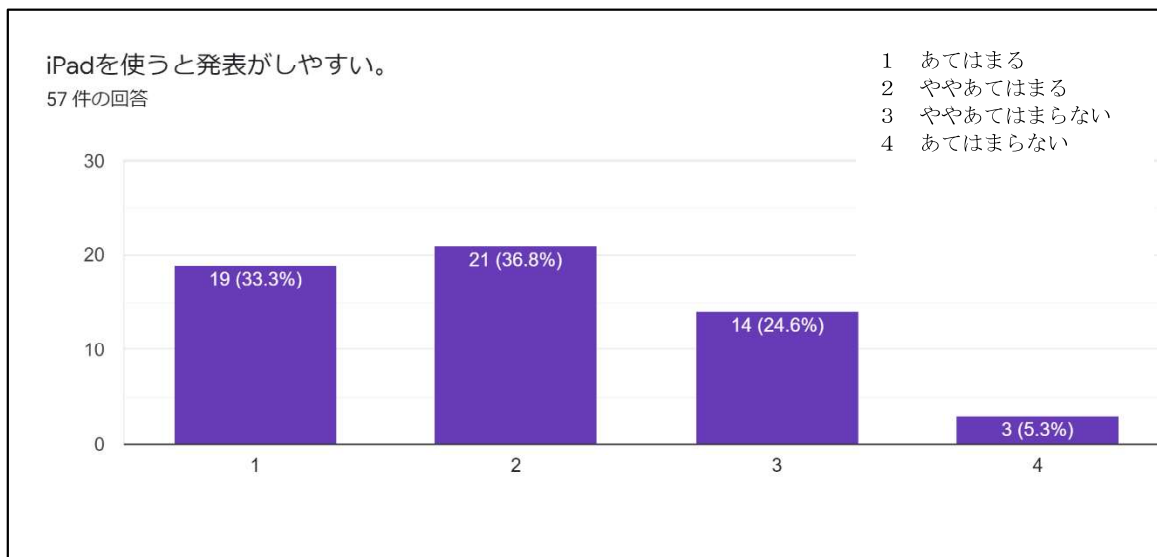


図8 iPad は発表に効果的か(児童生徒)

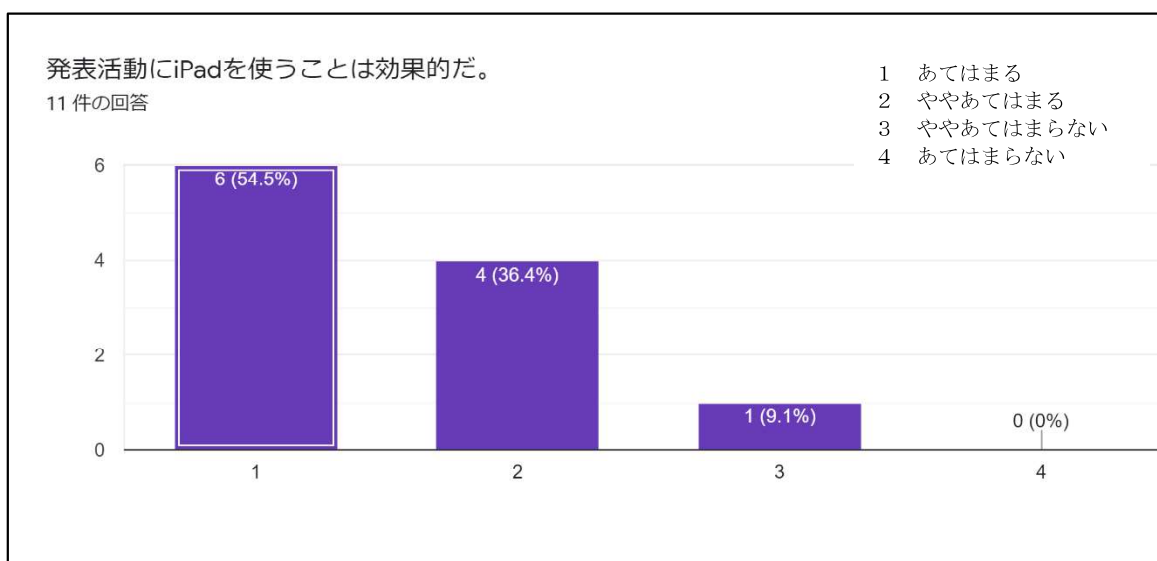


図7の結果から、iPad を使うと発表しやすいと思わない生徒が一定程度存在する。児童の聞き取り調査に次のような回答がある。

「操作がよく分からず、情報機器を使わずにやった方が早い場合もあり、かえって時間がかかり、授業時間が無駄になってしまうこともあった。」

このことは、児童生徒のタブレットの活用能力を育てていくことが大切であることを示唆している。これからも ICT を使うことが目的ではなく、ICT を使うことで学びの可能性が広がることを目指していきたい。

G-suite の導入により、オンラインで課題の提示と提出の方法ができるようになり、Google Forms によるアンケートや小テストの実施も可能になった。

教師の報告書から、iPad の様々な活用方法が生み出されていたことが分かった。小名教諭は、iPad でマスクの制作過程の動画がいつでも見られるようにした。また、児童は作品を撮影し、時間があるときにキャプションを加えてレポートを作り上げていた。

仲地教諭は、ReplayCam(時差再生が可能なカメラアプリ)というアプリを活用した。児童は自分の

試技を見て、改善点を考えたりしながら練習することができた。

中学部の照井教諭と速水教諭は、非常時にオンライン授業へシームレスに移行できる授業案の研究・実証を試みた。日常の授業から G-suite を活用している生徒は、非常時には教室で行われている対話を Google Meet に置き換える感覚で授業に臨むことができる。

本取組後に実施したアンケートから、iPad が生徒の学習活動に学習意欲向上に影響を与え、インターネット活用の有用性を示していることがわかる（図9 図10）。

図9 iPadと学習意欲・有用性について〈児童生徒〉

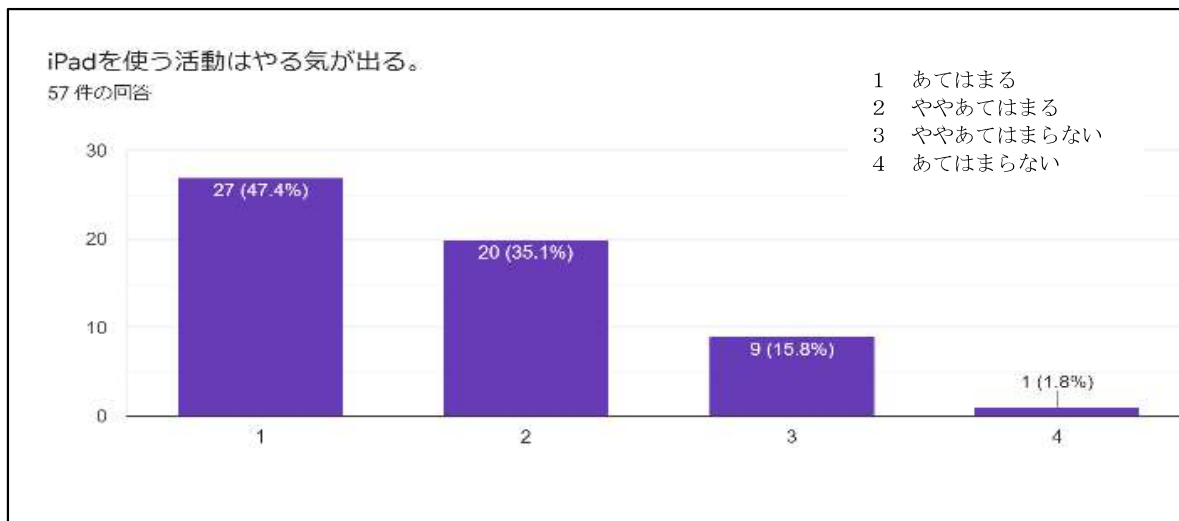
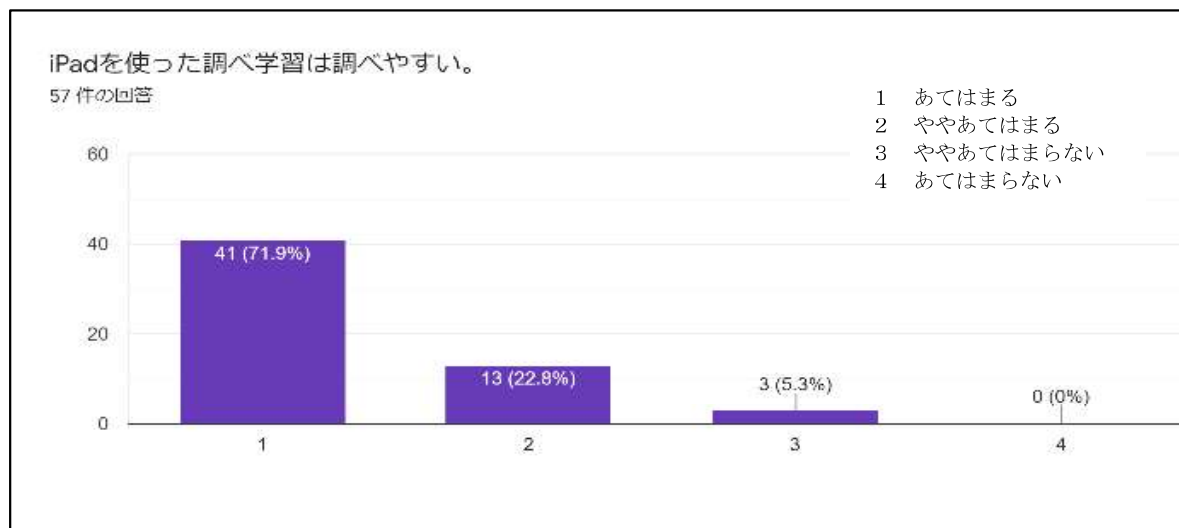


図10 iPadと学習意欲・有用性について〈児童生徒〉



児童生徒の記述からは、肯定的なものが多く上がっている（表6）

表6 iPadの活用に関わる児童生徒の記述

「iPadが一人一台使えるようになって、どのような変化がありましたか。」

授業が楽しい。
やる気が出た。
みんなで同時に調べやすい。
調べる範囲が広がった。
便利になった。
調べ学習がとてもやりやすくなった。
調べ学習がすらすら進むようになった。
授業が分かりやすくなった。
教科書で分かりづらい部分をいろいろな方法で調べられるようになった。
教科書に載っていない発展的なことが調べられるようになった。
自分の調べたいことが調べられて、自分のペースで課題を進められるようになった。
教科書だけの知識以外に知ることができた。
調べ学習に積極的になった。
素早くみんなが調べられる。

本校は、令和3年2月1日より、ベトナム国政府の指示により、再び休校措置を実施している。実証事業により、ICT機器を活用してきた児童生徒と教員は、一年前の休校措置の時とは異なり、翌日より、オンライン授業への移行を達成した。「非常時の学びの継続」という課題に対する本校としての答えに近付いていると強く感じている。

8. 今後の課題・展望

（※次年度以降への継続性及び発展性に言及してください。）

今後の課題

- (1)本年度、十分に組み合わせていない部分について
 - ①セキュリティー上の課題の洗い出しと、マニュアルの整備
 - ②G-suite for Educationの活用上の課題の解決(特に実技教科)
 - ③低学年へのタブレット配布と、全校を対象としたルール作り
- (2)これからさらに発展させる上で検討すること
 - ①効果的な(使用しやすい)アプリケーションの吟味・導入
 - ②ICT機器のメンテナンスに関する規約・予算の整備
 - ③各教員の授業におけるICT活用のさらなる推進
 - ④オンライン授業実施時の児童生徒の学習状況の把握

(1)については、喫緊の課題であり、特にセキュリティーの向上については、今後も専門家の助言を得ながら、高めていきたい。児童生徒の情報モラル教育についても、全校体制で取り組む課題である。G-suite for Educationの機能については、手探りのところをようやく脱したところであり、まだ使用していない機能がいくつもある。授業への活用に加え、Google Forms やGoogle ドライブの適切な使用により、校務全体の効率化が図れる。様々な視点から活用を推進していきたい。

(2)については、本校のICT活用を推し進める上で、目の前にある課題である。特に、各教員の授業におけるICTの活用を進めることにより、本実証事業でも見られたように、新しいアイデアが生まれたり、児童生徒の活用スキルが高まったりすることが予想される。ICT活用は目的ではないが、活用し、成功や失敗を繰り返す中で、本当に教育的効果の高い活用が生き残ると考える。次年度もICT担当教員と校内の学習指導部が協力して、本校の重点課題として取り組むことが重要である。

今後の展望

本校は、2月現在、政府の指示により突然の休校を余儀なくされている。先にも述べたとおり、本事業の取組があったため、休校翌日から授業を再開できた。ベトナム国は今後も感染者が発見される都度、今回のような措置がとられるため、本校の教育活動において、オンライン授業は間違いなく「教育活動の中心軸」の一つとなる。児童生徒の学びを保障するためには、本実証事業終了後も、継続して実践を繰り返し、オンライン授業のスタンダードを確立することが重要である。

本校のスタンダードを確立すること。他校の実践を取り入れながら進化・発展させ、児童生徒や教員が、非常時に安心して学びを継続できる環境を構築していきたい。

9. 所感

本取組により、本校の ICT 環境の構築が一気に進んだ。ベトナム国の様々な事情により、機材が思うように入らないなどの困難もあった。そこに、コロナ禍の追い打ちがあり、派遣予定の教員が渡越できない状況が発生し、本事業の終盤には、臨時休校措置がとられるなど、不測の事態が多く発生した。本実証事業は、余裕のあるときに用意周到に準備して行った実践ではなく、まさに今、日々の現場で起こっていることを解決するために、各教員が歯を食いしばって努力した内容を実践としてまとめたものとなった。

それぞれの教員の置かれた状況や目指すことは完全には一致していない。しかし、この報告書には「本当のこと」や、児童生徒あるいは教師の「本当の気持ち」が書かれている。この報告書が、オンライン授業に悩む先生にとって、何かのヒントになれば幸いである。

最後に、本実証事業を行う上で、海外子女教育振興財団事務局の皆様をはじめ、ICT 教育アドバイザーの河内晋太郎様、JICAベトナムサイバーセキュリテュー専門家山崎大人様、KDDIベトナム末國様、JAL様、国立高専機構様に多大な御協力をいただいたことを感謝したい。

※提出いただいた報告書や成果物は、本事業の取組成果として公開する予定です。また、記載いただいた内容は文部科学省や海外子女教育振興財団のその他の資料にも使わせていただく可能性があります。

※記入欄は適宜拡張してください。